

田瑞穗著

宋明清小說叢考

研文出版

澤田 瑞穂（さわだみずほ）

一九一二年高知県生れ

早稲田大学（文学部）教授 文学博士

主著『中国の文学』（学徒援護会）、『地

獄変』（法藏館）、『校註破邪詳弁』（道

教刊行会）、『中国の昔話』（三弥井書

店）、『佛教と中国文学』『増補 宝巻の

研究』『鬼趣談義』（国書刊行会）、『中

国動物譚』（弘文堂）ほか。

宋明清小説叢考

一九八二年二月一〇日 第一版第一刷発行

定価六〇〇〇円

著者◎澤田 瑞穂

発行者 山本 敬太郎

発行者 研文出版（山本書店出版部）

東京都千代田区神田神保町二一七

電話 東京二六一一九三三七

振替 東京〇一五九九五〇

印刷 清水印刷所

製本 板倉製本

3098—9003—2019

宋明清小說叢考
目次

発跡変泰

紅蓮柳翠

「四帝仁宗有道君」——明代説唱詞話の開場慣用句について——

索・刀・薬——『前前太平記』の一挿話と明代公案小説——

宝蓮寺奸僧事件

芙蓉屏異伝

張一飛公案その他

公案綺聞鈔

擬装入水殺人事件

107

雷公殺人事件

116

六本指の男

120

勘釘余響

127

姦夫が姦婦を殺す話

132

訟師の悪智恵

139

感孕奇案

146

烈女切腹異聞

152

犯姦婦杖刑の事

155

戸板流しの私刑

159

強姦か和姦か

160

玉堂春散策

砒霜の禁

『金瓶梅』の研究と資料

隨筆金瓶梅

西門家伝説	205	潘金蓮の眸	207	張竹坡の「説法」	208
滿文金瓶梅	212	金瓶梅伝奇	215	俗曲中の潘金蓮	217
明治訳金瓶梅	223	明治の西門慶	225	葡萄棚の下で	228

西遊演義枝譚

道書と見られた西遊記	231	唐僧取経嘆拾声	235
西遊記の草双紙	237	唐三蔵の杖	239

小説娛目鈔

宜春香質	241	警世選言	243	哈密野史	244	帰蓮夢	245
驚夢啼	246	幻中真	248	鴛鴦配	251	療妬縁	252
永慶昇平	252	忠孝勇烈木蘭伝	254				

清末の小説

遊戯——清末小説管見——

地獄の報告書——李伯元作『活地獄』のこと——

清末文学一隅

蔣劍人撰ジャンヌ・ダルク伝 327 梁啓超の羅蘭夫人伝 328

三害問題と小説 329 日露交戦と時事歌謡 331

清末の「新名詞」論議

あとがき

書名・作品名索引

宋明清小說叢考

発跡変泰

一

南宋時代の首都杭州の風俗を記した耐得翁の『都城紀勝』に、当時の寄席芸能（瓦舍衆伎）について述べている。寄席の講釈（説話）には四派があつて、その一は小説家、これを銀字兒ともよび、烟粉・靈怪・伝奇・説公案でこれらはみな搏刀趕棒および発跡変泰の物語。説鉄騎兒は士馬金鼓の話。説経は仏書講釈。説参請は賓主参禅悟道などの話。講史書は前代の書史文伝・興廃争戦のことを語つたという。

また同じく宋の呉自牧の『夢梁錄』（卷二十、小説講経史の条）にも、説話は舌弁ともよばれ、四派あつてそれぞれ専門が違つていた。小説すなわち銀字兒は、烟粉・靈怪・伝奇の類。公案は朴刀桿棒・発跡踪参の話だと見えており、以下、談経・説参請・説諱経・講史書と、それを得意とする芸人の名とを列挙している。

＊『都城紀勝』の文の句説は、王古魯氏の説（古典文学出版社刊『一刻拍案驚奇』附録）によつた。

『夢梁錄』にいう公案の朴刀桿棒は、『都城紀勝』の搏刀趕棒に相当する。それならば、発跡踪参もまた発跡変泰と同じものでなければならぬ。踪参は仏教語のようににもみえるが、そんな言葉はない。思うにこれは字形の相似から

くる跡泰の誤写であり、発発は発変。すなわち発変跡泰と文字を顛倒させてしまったのである。

発跡の跡は迹・蹟と同じで、人の功業の見るべきものの、すなわち事蹟・事歴である。発は発起・発興・発祥の意。俗語でも発家・発財といえば成金になることをいう。発跡とは従って貧賤より身を起して出世し、高貴顯榮の地位に昇ること、つまり成功とか立身榮達とかいうに同じである。それも新しい熟語ではない。たとえば『後漢書』卷四十九の耿弇伝に、光武帝のために山東を討つて武功をたてた將軍の耿弇こうがんに対して帝が賞讃していったことば——「むかし韓信は歷下（地名）を破りて以つて基を開きしが、いま將軍は祝阿（地名）を攻めて以つて発迹す。これみな齊の西界、功は相方（さうほう）ぶるに足る。」また『文選』卷四十八、司馬相如の「封禅文」にも「后稷は唐堯に創業し、公劉は西戎に発迹す」と見え、同じく卷四十五、楊子雲の「解嘲」にも「公孫は金馬に創業し、驃騎は祁連に発迹す」と見えている。漢の公孫弘が金馬門に対策して第一となり、博士に拜せられたこと、ならびに驃騎將軍霍去病かくまへいが匈奴を祁連山に擊破して功をたてたことをいっただのである。いずれも主として王侯武將の功業に対して発跡の語を用いていることは注意すべきである。

★譚正璧氏が、その「宋元話本存佚綜考」で、「発跡二字の意味はあまりはつきりしないが、しかし修練、成功をさすことばとすれば、神仙の一項とも衝突しない」と説いているのは（『話本与古劇』三頁）、発跡を『醉翁談錄』の分類の一つたる「神仙」に無理に該当させようとしたものである。

変泰とは何か。同類の熟語に交泰・否泰・開泰などがある。ともに易の「泰」の卦から出たことばである。地天泰の卦は「小往き大來る。吉にして亨（よ）る」とあり、その象辭に「則ちこれ天地交りて万物通ずるなり」と見え、象辭にも「天地交泰して後に天地の道を財成し、天地の宜しきを輔相し、民を左右（さだ）す」と見えている。これの逆が天地否の卦で、象に「則ちこれ天地交らずして万物通ぜざるなり」とある。個人ならば不遇、国家ならば動亂が極まると、万事亨通して運勢が開け、榮達に向い、世は太平に復する。いわゆる否極泰來である。かように泰は通と訓ず

るから、変泰は変通というに同じである。

*変泰を泰（安泰・泰平）に変ずる、ともよめるし、また変（戦争）と泰（平和）ともよめるが、易の辭に従つて上記のように変通と解するのが穩当であろう。譚正璧氏は別に變泰を變態とよんで變化の意味と解し、『醉翁談錄』の分類「妖術」に合わせようと試みており、他にもこれに従つて變態とよみかえる人もあるようだが、承服しがたい。

二

市井の名もない男が、何かのきっかけから運が開ける。それからとんとん拍子に立身して功名をたて、最後には王侯将相または帝王のような高貴の地位にまで榮達する。これみな、かくなるべき幸運を負うて生まれて来たからである——といったような出世物語がこの発跡変泰説話である。

最後の榮達を際立たせるために、発跡以前は極めて鄙賤・窮迫の生活を送っていたものとして語られる。出身が粗暴・無頼の徒であつた場合さえある。説公案の中で、搏刀桿棒すなわち刀槍を揮い棒術を使う豪傑の武勇伝と並べてあるのも故なしとしない。

『醉翁談錄』の話本分類によると、靈怪・煙粉・伝奇・公案・朴刀・桿棒・神仙・妖術の八類となる。『都城紀勝』などの分類から見て、発跡変泰に関係があると考えられるのは朴刀と桿棒とであるが、そこに挙げられた話本名の考察によると、この二つは、本質的には大差のない英雄豪傑義士の武勇談——後世のことばでいえば一種の武俠小説で、ただその武器や武術が刀槍か拳棒かの違いがあるにすぎないものらしい。そうして『都城紀勝』や『夢梁錄』に搏刀桿棒と並記せられた発跡変泰の名目が、ここには全く見えないところから察すると、『醉翁談錄』の朴刀・桿棒には、発跡変泰を兼ねたものが混在していたかも知れない。武術に強い豪傑が後に榮達を得れば同時に発跡物にもな

るからである。

たとえば『警世通言』第二十一巻の「趙太祖千里送京娘」は、若き日の宋太祖趙匡胤ちやうきやういんを主人公とする物語である。無頼漢のために拐かされて一道観内に監禁されていた趙京娘という娘を、青年趙匡胤が救い出し、同じ趙姓であるところから妹として保護しながら遠く離れた娘の郷里に送りどける。途中山賊と闘ってこれを倒すなどの武勇伝もあった後、無事に娘の家に着くと、その両親は恩人匡胤に向って娘の婿にと懇請する。匡胤は怒ってそこを跳び出し、娘は恥じて自殺をする。匡胤即位の後この消息を聞いて嘆息し、一祠を立てて京娘を貞義夫人に封じたという。宋太祖の義心と武勇と、そして女色を貪らなかつた潔癖とを賞讃したものである。

この巻は入話に「胡元之乱」「金元継起」等の語があるから明人の筆が加わっているものと推定されるが、内容は太祖の武勇・義俠を主とし、引証の詩にも「説く時は義氣は千古を凌ぎ、語り到れば英風は九霄に透る。八百軍州の真の帝王、一条の桿棒もて雄豪を顕はす」ともたたえているから、明かに一篇の桿棒物である。しかし同時に、「かれがいまだ発跡変泰せざりし時には、これまた鉄錚々たる好漢にして、直道して行い、一邪だにも染まざりけり」とか、「かれが我をよびて貴人となし、また我を見てあえて正坐せざるは、我かならず常人にはあらざらん。他日もし発跡せば、まさに（かれに）封号をば加ふべし」などという文句もあって、一面に発跡物の要素をも含んでいる。同一の主人公でも、物語としての力点のおきかたによって、桿棒物にも発跡物にもなり得ることが知られるのである。

* 『酔翁談録』所録の宋人話本名目については、譚正璧氏の『話本与古劇』十三頁以下に詳しい。なお同氏は、桿棒の中の『飛龍記』というのが、上記の『趙太祖千里送京娘』と同一内容の話本ではなかつたかと推定考証している。

市井無頼の徒が身を軍卒に投じて次第に昇進し、ついには風雲に際会して帝王あるいは諸侯の位に即くといった典型的な発跡物の話本が三篇ばかり伝わっている。その一は『古今小説』第十五卷の「史弘肇龍虎君臣会」。その二は同書第二十一卷の「臨安里錢婆留發跡」。その三は『醒世恒言』第三十一卷の「鄭節使立功神臂弓」である。「史弘肇龍虎君臣会」は極めて古拙素樸の趣をもった話本である。入話中に「後來南渡過江」とあり、また洪邁の『夷堅志』とか孝宗朝とか淳熙年などの名詞が見えるから、それ以後の作に違いないが、また篇末に「這話本是京師老郎流伝」の語もあって北宋以来伝承の古話本たるを示している。明の嘉靖間の人晁瑛の『宝文堂書目』に「史弘肇伝」が著録されているのは、けだしこれと同一素材の話本であろう。

* 戯曲化されたものには、『輟耕錄』に金の院本として「史弘肇」一本、『南詞叙錄』宋元旧篇の部に戯文「史弘肇故郷宴」一本、『遠山堂明劇品』には葉憲祖の雜劇「巧配閻越娘」一本が著録されている。錢南揚『宋元南戲百一錄』一七二頁、同氏『宋元戲文輯佚』四八頁には戯文の佚曲が引かれている。

この話本は文中に発跡変泰の四字を連用すること四回、発跡の二字だけでも八回の多きに及ぶ。あくまで発跡物の話本として語られたことが知られる。

五代唐朝のころ閻招亮えんしやうりやうとよぶ笛造りの名人があつた。東岳炳靈公へいれいこうの命により、冥間の東岳殿に招かれて一管の龍笛を造って献じた。褒美を問うと、閻はその妹の越英えつえいが娼妓に身を落しているのので、早く苦海を出て良き夫に添わせてやりたいと希望すると、炳靈公は嘉納せられ、殿前の一好漢を陽間に戻して越英の夫とすることを約する。閻は蘇生して帰宅をする。

ある雪の日に、門前を通りかかった大男がある。見ればかの東岳殿前で一見した男とそっくりである。呼び入れて

酒をくみ交しつゝ話を聞けば、この男は開道營の軍兵で史弘肇しこうせうという異相の乱暴者。やがて妹の婿にと切り出すと、史弘肇は我儘勝手な条件をつけてその結婚を承諾した。

二カ月ほどの後、兄貴分の郭威かくいが訪ねて来る。これまた人殺しをしたこともある乱暴者。それからは二人で暴れ廻つて村ぢゅうの嫌われ者となつていたが、時の後唐朝の宮女の一人で、民間に出嫁するを許された柴夫人が、郭威の人物の尋常ならざるを見こんで押しかけ女房となる。

郭威は妻の勧めで河南の令公符彦卿ふりげんきやうのもとに身を投じ、大部署という地位を与えられたが、もちまへの乱暴と俠氣から、またもや殺人を犯し、遁れて開封府の大尉劉知遠りゅうちえんの参謀となる。劉が太原府の節度使となるや、史弘肇も將校として兵を率いて来り、ここに史・郭の義兄弟は再会して、ともに劉の左右の参謀に任ずる。後に劉が晋に代つて天下を取り、漢の高祖皇帝となると、史弘肇も単・滑・宋・汴四鎮の令公に榮進し、富貴榮華を極めたという。なお話本は最後に歐陽脩の『五代史』により、弘肇の武官歴を略叙した後、郭威が周太祖として即位した時には弘肇はすでに死んでいたで、太祖はこれを鄭王に追封したと結んでいる。

* 金代の作といわれる諸宮調『劉知遠伝』は漢高祖劉知遠を主人公とする発跡の物語で、「知遠は宋発跡潜龍漢高祖」など、発跡の二字もしばしば現われており、人物としては史弘肇や郭彦威（郭威）も登場する。知遠を主人公とする劇には、元の劉唐卿の『李三娘麻地捧印』（佚）や明人の伝奇『白鬼記』（六十種曲本と富春堂本の二種）がある。

「臨安里錢婆留發跡」は、五代乱離の世に生まれて呉越十四州に霸王となつた錢鏐せんりゅうの立身談である。本づくところ、および著作の年代は明かでないが、文中にいう「杭州府臨安県」は明代の名称であるから、この話本も明人の作らしいとする人もある*。

* 『古今小説』附冊、敎敦易氏の「古今小説四十篇の撰述年代」。なお清の周清源の『西湖一集』巻一もこの話本を敷衍し

て錢王のことを語っている。

錢王は幼名を婆留^{はりゅう}といった。誕生の時、家の屋上から一丈余の大蜥蜴がはいくんだり、火光が天に達するなどの怪異があつたので、父親は妖物として殺そうとしたが、隣家の王婆に留められてやめた。婆留の名はこれに本づく。五六歳のころより容貌雄偉、腕力非常で、戦争ごっこをすればつねに腕白大將になつて村の子供たちを指揮した。十七八歳ともなると、武芸に熱中して学問も商売もふりむかず、酒や賭博に日をくらす無頼の徒になつた。そうして塩密売の連中と交際するうち黄巢^{こうそう}の乱が起ると、杭州刺史董昌^{とうしょう}の部下となつて功をたてる。それ以後は權謀術数を用いて次に政敵を倒してゆき、ついには董昌をも滅ぼして呉越に覇をとまえ、生地杭州に錦を飾る。後に梁の朱全忠から呉越王に封ぜられたが、その行動儀容は実に皇帝に異らず、子孫相伝えて、宋太宗に領土を獻ずるまで錢氏九十八年の位を保つたという。

「鄭節使立功神臂弓」は発跡物と靈怪物との複合であるが、文中に發跡變泰の四字を用いること三回、發跡の二字を用いること五回に及んでおり、大体は發跡談をねらつてゐる。ただし製作の年代は前の二種よりもやや下るようである。

東京開封府の豪商張員外が東岳廟の炳靈公殿に参詣したとき、不思議な力をそなえた廟の和尚が炳靈公と挨拶を交わすのを物蔭から見ていると、全身に刺青をした大男が引かれて来た。その男は、三年でも天子になりたい、諸侯なんかななるのは嫌だといつて頑張るので、炳靈公ももてあましていたのだが、和尚の意見でその男をさんざんに叩き、ついに諸侯で我慢することを承認させるところを目撃した。もつともそれは張員外が廟の一亭でみた一場の夢であつた。

その年の冬、ある風雪の日に、破れ衣服を着た裸足の男が張家に物乞ひに来了。それが東岳廟で夢にみたあの男のそっくりである。驚いて姓名を問うと、それはもとかなりの良家の子で、鄭信というものであつた。鄭信これより張

家の番頭にとりたてられたが、あるとき、ゆすりに来たごろつきの夏徳という男と格闘してこれを殴り殺し、罪にやつて獄に投ぜられた。

このころ、開封に妖怪がすむという古井戸があり、ためしに罪人を入れてみると片端から殺されて、すでに数十人が死んだ。最後に鄭信が探險のため井底に下り、そこで紅蜘蛛と白蜘蛛の精である二美人——日霞仙子と月華仙子とに逢い、鄭信の助力で月華仙子を殺して日霞仙子と夫婦になり、同棲三年の後に一男一女を得た。後に鄭信は功名を立てるため、仙女から神臂克敵弓を贈られて現世に還り、河北太原府の將軍种師道にその弓を献じ、これを軍用に供した功によって帳前管軍指揮に任ぜられたが、さらに戦功を重ねて十余年後には両川節度使となった。仙女は一男一女を張員外家に託し、一子の鄭武は生長の後に父に従つて武功をたて、官も宣撫使に至った。康王が金兵に追われたとき、金甲の神人が神兵を率い、神臂弓をもつて敵兵を退散させた。これは前両川節度使鄭信將軍の冥護と判明し、康王即位の後に、明靈昭惠王に勅封し、廟を江上に立て、今に至るまで古蹟なお存するという。

* 本来は豪傑が妖怪を退治する岩見重太郎式の話であつたと思うが、ここではかなり軟化して異類交婚談に変化している。蜘蛛退治は『醉翁談錄』の「紅蜘蛛記」および『宝文堂書目』著録の古話本「紅白蜘蛛記」を取り入れたものであらう。戯曲には明初の楊景賢の雜劇「紅白蜘蛛」、無名氏の戯文「鄭將軍紅白蜘蛛」、清の張大復の伝奇「井中天」がある。趙景深『小説戲曲新考』二六頁、譚正璧『話本与古劇』一五頁・五一頁・一二二頁参照。

四

この三篇に共通するものを考えてみよう。第一に気づくのは主人公のパーバリズムである。豪勇・粗野・放縱・恣態・一徹——ひとくちにいえば野性的なその性格と行動とが淋漓として活写されている。郭威と史弘肇とは日ごと酒